立正大学博物館 館報

万吉だより

MA GECHI NEWS

第 23 号 平成 28(2016) 年 9 月

開館 15 周年を迎えて

館長　時枝　務

立正大学博物館は、平成 28（2016）年 4 月 1 日に、目出度く開館 15 周年を迎えた。立正大学博物館が呱々の声をあげたのは、平成 14（2002）年 4 月 1 日のことであるが、開館までには長年にわたる先人の努力があった。

昭和 7（1932）年、久保常晴・本田茂一・桃井秀治朗・矢追隆家の努力で、現在の品川キャンパスに考古学標本室が開設された。そこには、久ケ原遺跡出土の弥生土器をはじめ、当時立正大学非常勤講師で後に東京帝国大学の考古学講座の教授となった原田淑人寄贈の中国の俑など、同じく当時立正大学非常勤講師で東京帝室博物館鑑査官の石田茂作寄贈の瓦経などが陳列され、当時としては立派な展示施設であった。

やがて、考古学標本室は考古学資料室と改名され、名実ともに一層の充実をみたが、アジア・太平洋戦争の折には近隣の住民の避難場所となって機能麻痺に陥った。しかし、戦後、考古学資料室は再生し、久保常晴教授・坂誥秀一教授のもとで実施された数多くの発掘調査の成果を反映し、旧に倍した資料が集積されることになった。

また、昭和 53（1978）年、熊谷校地開発に伴う遺跡調査の成果を展示する施設として、考古学陳列室が熊谷校地に設けられた。そこには、熊谷校地の敷地から出土した遺物に加え、ネパールのティラウラコット遺跡の出土品も展示された。

こうして、立正大学には 2 つの考古学展示施設が生まれることになったが、それぞれ設置の経緯も、展示の内容も異なる自立した施設であった。

その後も資料は増加し続け、とりわけ、縄文時代の考古資料を主体とする吉田格コレクションと、梵鐘を主体とする撫石庵コレクションの寄贈を受けたことは特筆されよう。そうした動向を受けて、平成 14 年、品川キャンパスの考古学資料室と熊谷キャンパスの考古学陳列室が合体し、遂に立正大学博物館が誕生した。

このように、立正大学博物館は開館 15 周年を迎えたばかりであるが、その前身施設にまで遡れば優に 80 年を越す歴史を持っており、その重みを踏まえた発展が期待される。

第 11 回企画展
「深海のサンタクロース - 小笠原の宝石サンゴ」

地球環境科学部　岩崎　望

2014 年秋、小笠原諸島近海にアカサンゴを狙った中国漁船が押し寄せました。その数は日々増加し、10 月 30 日には 212 隻に達し、12 月末までに延べ 2106 隻が確認されました。この事件で、自宅の箪笥に眠っている珊瑚を、思い出された方も多いのではないでしょうか。もし珊瑚があれば、手に取ってみて下さい。その珊瑚には、様々な物語が秘められています。

宝石サンゴ　輸入品から輸出品へ

珊瑚は、かつては輸入品でした。地中海で採取されたものが西アジア、中央アジアを経て日本にもたらされました。その足跡は、珊瑚が出土した 25,000 年前のドイツの遺跡、新疆（しんきょう）の七角井細石器遺跡（10,000 年前）やニヤ遺跡（漢代から晋代）、罽賓（けいひん）国（インド北西部）の遺跡などに遺されています。

珊瑚が日本に伝わった年代は、定かではありませんが、正倉院には珊瑚の残闕（ざんけつ）が遺されています。これは、聖武天皇、光明皇后が奈良東大寺の大仏開眼会（752 年）で用いたとされる冠を飾っていたものです。時代は下り、徳川三代将軍家光の娘千代姫が、尾張藩主徳川光友との婚礼（1639 年）の際に持参した調度品に、珊瑚があしらわれています。これは“初音の調度”（国宝　徳川美術館蔵）と呼ばれ、硯箱などの蒔絵に、梅の花を模した珊瑚が象嵌（ぞうがん）されています。江戸時代後期には、緒締めや簪に珊瑚が用いられるようになり、富裕層に珊瑚が拡がる様子が覗われます。そして、美しさや異国への憧れを反映してか、宝船の意匠や桃太郎の物語、歌舞伎の踊りなどに珊瑚が登場します。

日本で珊瑚漁が始まったのは、明治初年です。1880 年（明治 13 年）には、ベルリンで開催された国際漁業博覧会に、日本から大きな珊瑚が出品され、
ヨーロッパで評判になりました。こうして、輸入品であった珊瑚は、輸出品となりました。

企画展チラシ

生物としての宝石サンゴ

梅の花びらや玉に加工された珊瑚から、生きている姿を想像することは困難です。宝石として用いられるのは、生物を内側から支える内骨格に相当する部分であり、それは骨軸と呼ばれています。骨軸の周囲は、共肉と呼ばれる皮膚のような薄い組織で覆われています。共肉には、ポリプと呼ばれる袋状のものが多数有り、細い管で結ばれています。ポリプの口の周囲には、8 本の触手があり、餌を捕らえる役割を果たします。このポリプが、動物としての珊瑚の本来の姿です。因みに、珊瑚礁を形成する造礁サンゴの多くは、触手の数が 6 の倍数であり、宝石サンゴとは分類群が異なります。

骨軸は、骨軸上皮が炭酸カルシウムを分泌することで形成されます。形成過程で、海水からマグネシウム、バリウムなどの微量元素を取り込みま

す。これらの元素を用いて、宝石サンゴの生息地を同定する研究を進めています。出土品や文化財の珊瑚を分析し、コーラルロードとも呼ぶべき交易の道を明らかにすることを目指しています。

本学と小笠原の宝石サンゴ

さて小笠原の密漁事件ですが、短期間に行われた集中的な違法操業により、宝石サンゴなどの資源や、海底環境への影響が懸念されました。その被害を明らかにするために、農林水産省は「小笠原諸島周辺海域宝石サンゴ緊急対策事業」を実施しました。立正大学は、この事業を水産総合研究センターなどと共に受託し、2015 年 3 月に調査航海を行いました。調査結果を伝えるために、航海に参加した学生や、小笠原に関心を持つ学生など 7 名が、小笠原で展覧会を企画しました。そして、小笠原ビジタセンター（父島）で、2016 年 2 月 26 日から 4 月 15 日まで「深海の宝箱―宝石サンゴ」展が開催されました。

この経験を引き継ぎ、立正大学博物館において第 11 回企画展「深海のサンタクロース - 小笠原の宝石サンゴ」展を 10 月 1 日（土）から 29 日（土）まで開催いたします。今回も、学生が企画から展示品の設営までを手がけ、宝石サンゴとそれを育む小笠原の海を紹介します。海から遠い熊谷の地で学生たちはどのような展示を見せるでしょうか。是非ご来場下さい。

参考文献

岩崎朱実・岩崎望編著
『珊瑚　宝石珊瑚をめぐる文化と歴史』
東海大学出版会　2010 年

ポリプから 8 本の触手を伸ばす地中海産ベニサンゴ（岩崎 望　『宝石の四季』213 号　レッグ　2011 年 14-18 より引用）

展示の様子

展示を手伝った地球環境科学部の学生
後列左：岩崎 望 教授、岩城晴貞 氏（文化コミュニケーションズ研究所）

第 11 回特別展
横穴墓展開催にあたって

博物館担当副学長・文学部教授
池上　悟

かつて国土の再開発が盛んであった昭和の 40 年代以降の過去 40 年間は、尾根や台地の斜面に横穴を掘って埋葬施設とした“横穴墓”の調査が各地で行われてきました。

立正大学考古学研究室では、昭和 48 年の東京都日野市・梵天山横穴墓群、昭和 50 年の同・坂西横穴墓群、昭和 51 年の東京都多摩市・中和田横穴墓群、昭和 57 年の横浜市・熊ケ谷横穴墓群、昭和 58 年の同・熊ケ谷東横穴墓群などの調査を行ってきました。

池上はこれらの調査を坂詰博士の指導を受けて実践し、関東における重要な資料として全国的な横穴墓展開過程の究明に役立ててきたところであります。

また、これらの調査に参加した当時の考古学専攻の学生諸君は、その後に全国各地に埋蔵文化財調査の専門職として就職し、横穴墓を立正考古学一つの専門として世間に名を高めてきたところは周知されるところであります。

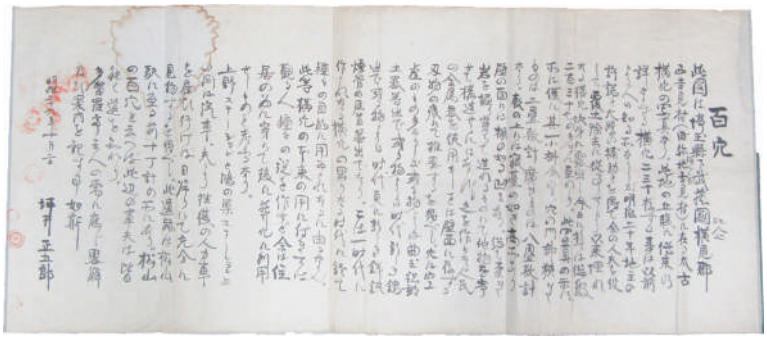
特に関東地方にあっては遠藤政孝、荒井世志紀、大谷　徹、松本昌久、上野恵司、小高幸男、近野正幸、足立佳代、西原崇浩、梶ケ山真理氏などが、各地の横穴墓の調査・研究において成果を挙げられてきております。

横穴墓の研究は、常に関東地方が主体として行われてきました。明治 20 年の帝国大学大学院生であった坪井正五郎の吉見百穴の調査は、横穴墓の性格をめぐって論争となり“穴居論争”と呼ばれています。古文献資料に認められる「穴居」の実態は何であったかが問題となったものであり、これが縦穴 (たてあな) か横穴 (横穴) かで争われました。坪井は横穴を住居とし、白井光太郎は墳墓と考えました。

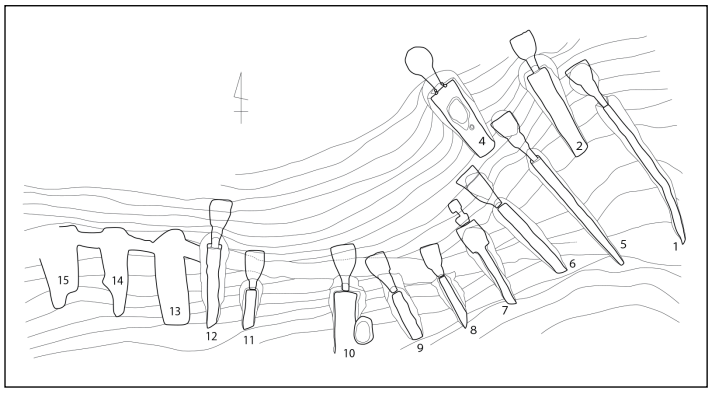
坪井は吉見百穴の調査を通じて、横穴が従来考えられていたような石器時代に属するものではなく、鉄器時代のものである点を明らかにしました。これはその後の研究の前提となったものであり、白井との間でたたかわされた横穴の機能についての論争は、各地の人類学会を通じて、全国的な横穴墓探索の風潮を助長しました。

立正大学熊谷校地の至近の距離に位置する吉見百穴横穴墓群は、昭和 50 年に 200 基以上の横穴墓の実測調査を果たし綜合的な検討を果たされた元埼玉県立博物館長の金井塚良一さんは、平成 27 年に亡くなられました。埼玉県の横穴墓研究を推進された功労者として明記したいと思います。

立正大学考古学研究室が調査した上記の横穴墓群のうち、多摩市・中和田横穴墓群のまとまった報告は未だ果たしてはいません。調査後 40 年を経過していますが、主要な調査成果を報告して、横穴墓研究の一助としたいと思います。



『百穴』（明治 29 年 坪井正五郎筆）立正大学考古学研究



中和田横穴墓群全体図

NEWS ①

品川キャンパス展示

平成28年6月22日（水）から10月11日（月）を会期として、品川キャンパス９号館エントランスにて『KARA-TEPE 2015 ―立正大学ウズベキスタン学術調査速報―』を開催しています。

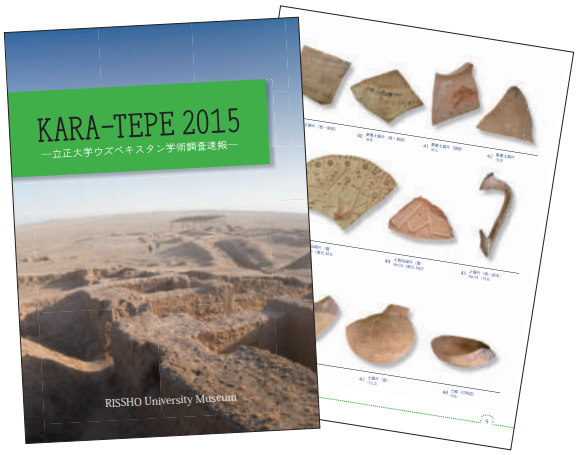
仏教系大学である立正大学は、インドからシルクロードを経由して中国に至り、日本に伝播した仏教の展開過程を明らかにするという目的を掲げて、2014 年度からウズベキスタン共和国に所在するカラ・テペ（Kara-Tepe）遺跡の調査を進めています。

カラ・テペ遺跡は、１～３世紀代のクシャーナ朝を盛期として造営された古代バクトリア地方における代表的な仏教寺院跡です。バクトリアの地は、７世紀の中国僧である玄奘が訪れたということが『大唐西域記』に記されています。

遺跡はアフガニスタン共和国との境をなす大河アムダリヤに面した丘上に位置し、南北 420m、東西 250m 規模で展開しています。その地形により大きく南丘、西丘、北丘に区分されており、それぞれの丘に洞窟や僧院、仏塔などの遺構が確認されています。

立正大学ウズベキスタン学術調査隊の調査地点は、北丘に構築された仏教伽藍のうち中心部に位置する僧院の西側回廊部分です。

2015 年度は、昨年度に引き続き僧院西側回廊部分を対象として、西側及び北側へ拡張して発掘調査を進めました。



展示パンフレット

その結果、日干しレンガによって南北方向に構築された回廊の西壁の存在を確認し、回廊の幅を明確にすることができました。また、この回廊は、北端において同じ幅で西側へ直角に屈曲していることがわかり、現在明らかになっている僧院の西側に別の方形僧院の存在を想定することが可能となるなど、極めて重要な成果をあげました。

また、墨書土器、人物像の頭部・ガルーダの頭部片と脚部分の破片、柱頭飾りなどの石灰岩製彫像類、皿・椀・鉢・壺・甕などの土器類、コインなど多くの遺物が出土しました。

この度の展示では、これらの調査概要と成果を写真パネルでまとめました。さらに、テルメズ考古博物館より学術研究のため寄贈された土器片も展示しています。

なお、本展示は平成 28 年 10 月中旬より博物館に巡回する予定です。

展示の様子（１）

展示の様子（２）

NEWS ②

入館者数

平成 28 年 4 月 1 日から平成 28 年 8 月 31 日の間、延 98 日開館し、総来館者数は 649 名でした。内訳は、一般の方 213 名、本学学生 254 名、本学教職員 46 名でした。

以上の期間に熊谷キャンパスにおいてオープンキャンパスが 3 回行われました。その際の来館者数は 136 名です。

出版物

◆『立正大学博物館年報』14
（平成 28 年 3 月 31 日）

◆品川キャンパス展示パンフレット
『KARA-TEPE2015- 立正大学ウズベキスタン学術調査速報 -』
（平成 28 年 6 月 21 日）

公開講座

本校、研究推進・地域連携センター主催の平成 28 年度春季オープンカレッジが、平成 28 年 6 月 25 日から 7 月 16 日の毎週土曜日に熊谷キャンパスで開講しました。

第 4 回目の講座では、当館前館長の池上悟 教授（文学部史学科）による立正大学博物館の収蔵品について、講演が行われました。

講演の様子（研究推進・地域連携センター提供）

館務実習

平成 28 年度の博物館実習は、以下の日程で行いました。実習生は、文学部史学科 2 名、文学部文学科英語英米文学専攻コース 1 名、大学院文学研究科史学専攻 1 名の計 4 名でした。

・8 月 5 日（金）
刀剣の取扱いに関する講義と実習
講師：田鴎和久 氏（文学部社会学科准教授）

・8 月 6 日（土）
古文書に関する講義と実習
講師：石山秀和 氏（文学部史学科准教授）

・8 月 8 日（月）
（午前）学芸員業務について
講師：時枝 務 氏（当館館長）
（午後）資料整理と台帳作成
講師：池田奈緒子氏（当館非常勤学芸員）

刀剣の取扱い実習の様子

古文書実習の様子

・8 月 9 日（火）
文化史に関する講義と梱包実習
講師：井上尚明 氏（立正大学非常勤講師）

・8 月 10 日（水）
自然誌に関する講義と実習
講師：北沢俊幸 氏
（地球環境科学部環境システム科 講師）

・8 月 11 日（木）
資料整理と台帳作成
講師：池田奈緒子氏（当館非常勤学芸員）

・8 月 12 日（金）
資料整理と台帳作成
講師：池田奈緒子氏（当館非常勤学芸員）

梱包実習の様子

平成 28 年度　実習生

資料活用

平成 28 年 4 月 1 日～ 9 月 30 日までの期間に、以下の機関に調査研究・資料貸出を行いました。

【調査・研究】
◆縄文土器（吉田格コレクション）
利用機関：加曽利貝塚土器づくり同好会
（千葉市立加曽利貝塚博物館 ）
利用目的：土器製作のため
利用期間：平成 28 年 7 月 2 日（土）

お知らせ

今年度、開催予定の企画展･特別展のご案内です。皆様ぜひ、お誘い合わせのうえご来館ください。

【熊谷キャンパス展】
◆ 第 11 回企画展
「深海のサンタクロース - 小笠原の宝石サンゴ」展
開催期間：平成 28 年 10 月 1 日（土）～ 29 日（土）
開催場所：立正大学博物館（熊谷キャンパス内）
開館時間：10 時～ 16 時
入 館 料　：無料

◆ 第 11 回特別展「横穴墓」展
開催期間：平成 28 年 11 月 24 日 (木) ～ 12 月 22 日（木）
開催場所：立正大学博物館（熊谷キャンパス内）
開館時間：10 時～ 16 時
入 館 料　：無料

【品川キャンパス展】
◆ 「立正大学博物館開館 15 周年記念」展
開催期間：平成 28 年 10 月 12 日（水）～ 1 月 16 日（月）
開催場所：品川キャンパス 9 号館エントランス

見学者の声

当館に寄せられたご意見・ご感想をご紹介致します。今後とも、皆様の声を博物館運営や展示に反映できるよう務めてまいります。貴重なご意見・ご感想をありがとうございました。

◆主に仏教系の出土品が置かれていて参考になった。外国の出土品があるのもよい。（18 歳・学生）

◆勉強になりました。ありがとうございました。（41 歳・男性）

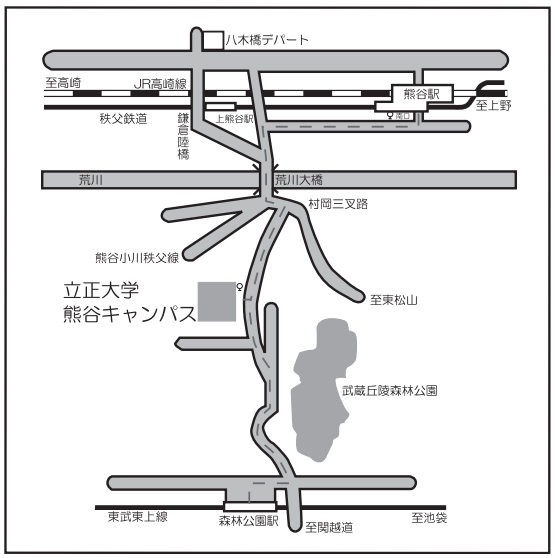
◆ティラウラコットのカピラ城のことで、シッダルタの両親のことがあったのは印象的でした（63 歳・女性）

◆子どもの勉強になりました。（36 歳・男性）

利 用 案 内

所在地：〒 360-0194　埼玉県熊谷市万吉 1700
立正大学熊谷キャンパス内
TEL　048 － 536 － 6150
FAX　048 － 536 － 6170
開館日：月・水・木・金・土曜日（大学休業中を除く）
開館時間：　10：00 ～ 16：00
※詳細につきましては、博物館ホームページをご覧下さい。
交通機関：
① JR 高崎線、北陸新幹線、秩父鉄道「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス（国際十王交通）で約 10 分。
②東武東上線「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス（国際十王交通）で約 12 分。

お問い合わせ：博物館または熊谷総務部総務課（048-536-6010）にご連絡下さい。



あ と が き

今年度、立正大学博物館は開館 15 周年を迎えました。これも一重に来館者の皆様、また博物館事業にご理解とご協力を頂いております教職員の皆様のおかげであります。

10 月からは本号で紹介いたしました第 11 回企画展・特別展を開催いたします。
今後とも立正大学博物館をよろしくお願いいたします。

題字揮毫　田 淵 観 斎（立正大学名誉教授）

立正大学博物館館報　万吉だより　第 23 号
平成 28（2016）年 9 月 30 日発行
編集・発行　立正大学博物館
〒 360-0194　埼玉県熊谷市万吉 1700
TEL 048 － 536 － 6150
FAX 048 － 536 － 6170
E-mail ： museum@ris.ac.jp
URL ： http://www.ris.ac.jp/museum/index

（印刷：アサヒコミュニケーションズ）